

【vol.49】マイナーキーことはじめ ～その1～ ナチュラルマイナースケールの基本

こんにちは、大沼です。

今回から『マイナーキー(とその楽曲)』について学んでいきましょう。

これまでは、ひたすらメジャーキーを元にして、
色々な事を学んできましたね。

ですが、世の中には、マイナーキーの楽曲も、
メジャーキーの楽曲と同じくらい存在します。

それでもあえて、メジャーキーを徹底的にやってきたわけですが、
その理由としては、単に「その方が、全てがわかりやすくなるから」です。

やはり、大本の基準として、あらゆる事がわかりやすいのが
メジャーキー(特にCメジャー)ですし、その知識なくして、先に進む事はできません。

メジャーキーの楽曲は、これまで学んだロジックでおおよそ分析できるのですが、
(※特殊なアレンジがされてなければ)

マイナーキーの楽曲は、イレギュラー的に、使うコードやスケールを
変化させるのが当たり前だったりします。
(※当たり前であるのなら、イレギュラーとは言えないかもしれませんが)

この辺り、特に独学でアドリブ理論やアレンジを学んでいると、
つまづきやすい所ではないかと思います。

なので、基礎としてのメジャーキーの知識があってこそ、
マイナーキーも理解できる、といった感じなんですね。

ツー・ファイブの進行がどうたら、とか、ハーモニックマイナーがこうたら、とか、
そういった、一見、意味不明なことをマスターしていくのも、
マイナーキーでのトレーニングが重要になってきます。

さらに、ディミニッシュ・スケールや、ハーモニックマイナー・パーフェクト 5th ビロウ、リディアン♭7などの、謎のスケール群を使いこなせるようになる為の基本も、マイナーキーにあります。

と、言うことで、当然、先に進むにつれて複雑にはなってくるのですが、一気にやろうとせずに、1つ1つクリアしていけば、どうにでもなりますので。

難易度の高いものをクリアした時、謎が解けた時、使いこなせるようになった時、ギタープレイでの、新しい快感が得られることでしょう。

この辺がわかると、演奏がかなり楽しくなってくるので、焦らず、じっくりと取り組んでいきましょう。

さて、ではまずは、基本中の基本、『マイナーキーのそもそもの概念』からやっていきましょう。

と、いってもメジャーキーの時とまったく同じなのですが。

例としては、マイナーキーを解説するときが一番わかりやすい、key=Am でいきます。

まず、key=Am の楽曲があった場合、

- ・その楽曲のトータル・センター(キー・センター)は『A 音』
- ・その楽曲の基準スケールは『A ナチュラルマイナースケール』

と、この2つの情報が得られます。

key=Am の場合、A 音を基準にして、ナチュラルマイナースケールのインターバルで音を並べて、基準となる音階を作る、と。

そしてその、ナチュラルマイナースケールの構成音を使って、楽曲の様々なパーツが成り立っているわけです。

ナチュラルマイナースケールのインターバルは、

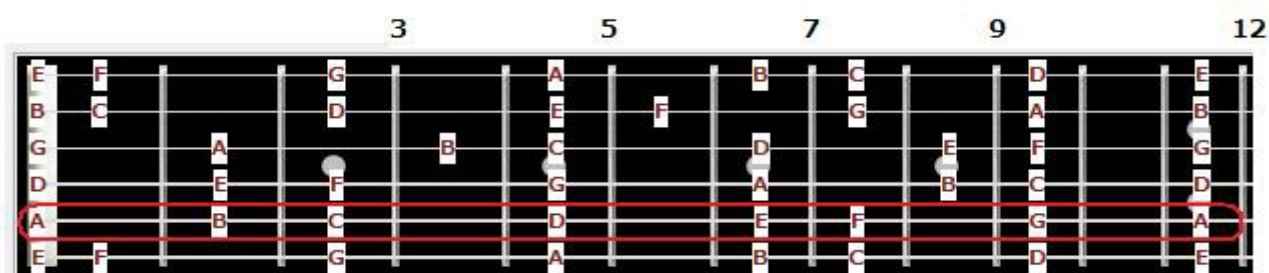
(tonic から)全音、半音、全音、全音、半音、全音、全音

と、なっていて、A 音をトニックにして音階を作ると、構成音は、

A、B、C、D、E、F、G

の7音になります。

図、A ナチュラルマイナースケール



構成音を見ての通り、A ナチュラルマイナースケールとCメジャースケールはまったく同じですし、これまでも時々、

『メジャーとマイナーのキーやスケールは、それぞれ対になっているモノがあるんですよ』

みたいな事を、それとなくお話ししてきましたね。

これまで散々Cメジャーキーを例にしてやってきたのも、マイナーキーを解説していく時、対になっているAマイナーキーが一番わかりやすいからです。

調号として#やbが出てこないのも、頭でも把握しやすいですし、視覚的にも、指板上で非常に見やすくなっています。

で、基準スケールの構成音がCメジャースケールと同じ、と言う事は、そこから形成されるダイアトニックコードも同じモノが出来上がる、と言う話になりますよね？

なのでkey=Amのダイアトニックコードと、キーセンターであるA音から見たインターバルは以下ようになります。

※Aマイナーキーのダイアトニックコード(トライアド / 4和音)

I m	(I m7)	Am	(Am7)
II m(b5)	(II m7(b5))	Bm(b5)	(Bm7(b5))
b III	(bIII M7)	C	(CM7)
IV m	(IV m7)	Dm	(Dm7)
V m	(V m7)	Em	(Em7)
b VI	(bVI M7)	F	(FM7)
b VII	(bVII 7)	G	(G7)

(※ V7 云々は後ほど解説します)

テキストの vol.30~31 くらいでやった、C キー時のダイアトニックコードと順番が違うだけで、コード自体は同じですね。

※C キーのダイアトニックコード

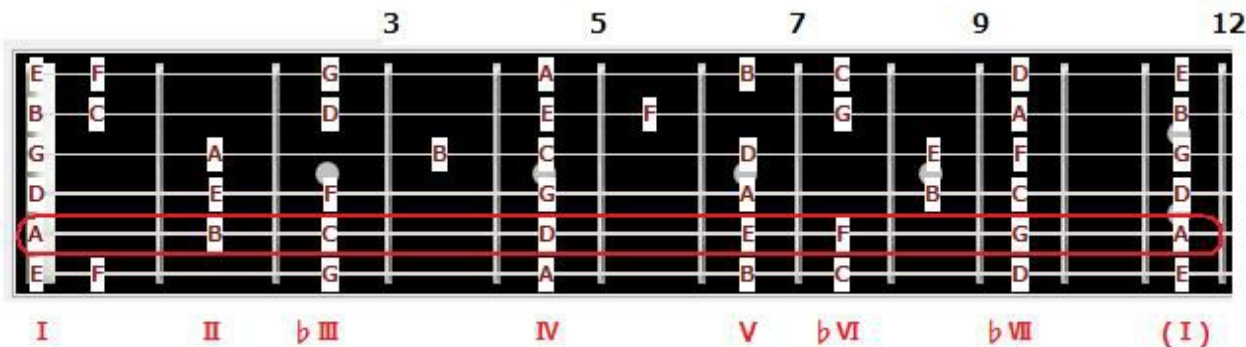
I、C	(CM7)
II、Dm	(Dm7)
III、Em	(Em7)
IV、F	(FM7)
V、G	(G7)
VI、Am	(Am7)
VII、Bm(b5)	(Bm7(b5))

両者の見てくれの違いとしては、ローマ数字のインターバルに b が出てきていることでしょうか。(b III、b VI、b VII)

これについては、指板上でインターバルを数えてみると、そうなっている理由がわかるでしょう。

図、A マイナーキー時、A ナチュラルマイナースケールのインターバル

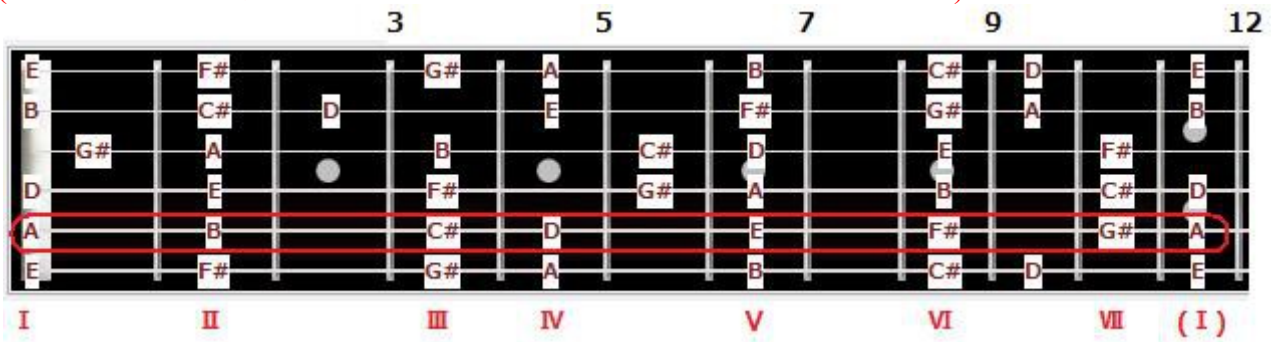
(※ローマ数字のインターバルに対応しているのは5弦の音です)



例えば、A メジャーキーと対比させると、より、b の付いている意味がわかりやすくなります。

図、A メジャーキー時、A メジャースケールのインターバル

(※こちらローマ数字のインターバルに対応しているのは5弦の音です)



A マイナーキーの方では、 \flat の付いている度数の音が、きちんと半音下がっていますね。

これらは、トナル・センターである A 音に対する、ローマ数字でのインターバルになります。

では次に、A 音をトニックとした、A ナチュラルマイナースケールの観点から、各音のインターバルを見てみましょう。

※A ナチュラルマイナースケールのインターバル

A(tonic) \Rightarrow B(M2nd) \Rightarrow C(m3rd) \Rightarrow D(P4th) \Rightarrow E(P5th) \Rightarrow F(m6th) \Rightarrow G(m7th or \flat 7th)

こちらも A メジャースケールと対比させて、違いを確認してみましょう。
結局、上の指板図と同じことなので、そちらを見ながらでも OK です。

※A メジャースケールのインターバル

A(tonic) \Rightarrow B(M2nd) \Rightarrow C \sharp (M3rd) \Rightarrow D(P4th) \Rightarrow E(P5th) \Rightarrow F \sharp (M6th) \Rightarrow G \sharp (M7th)

これらの例からもわかる通り、**ナチュラルマイナースケールとメジャースケールを比べると、3rd、6th、7th の3つの音に変化が起こっている**、と言う事ですね。

このポイントは非常に重要なので、しっかり把握しておいてください。
今後、色々なところで使います。

さて、先ほどから当たり前のように出てきている、“ナチュラルマイナースケール”と言う名称ですが、これが“ナチュラル”であると言うのなら、“ナチュラルでない”マイナースケールがあるのか？という疑問が湧いてくるかと思えます。

で、実際、あります。

主となるマイナースケールには3種類あって、それぞれ、

- ・ナチュラルマイナースケール(自然的短音階)
- ・ハーモニックマイナースケール(和声的短音階)
- ・メロディックマイナースケール(旋律的短音階)

と名前がついています。(※カッコ内は日本語訳)

どのスケールも、役割や使うべき状況がキチンとあるのですが、これからしばらくはナチュラルマイナースケールのことだけをやりますし、それを理解してもらえれば大丈夫です。

残りの二つは後々やりますので。

で、いま学んでいるナチュラルマイナースケールなんですが、要するに『フツのマイナースケールなんだな』と置いていてください。

ナチュラル(自然的)なんて呼ばれているくらいなので、そういうことです。3種あるマイナースケールの基本形ですね。

後、最後に、以前(講座の vol.21、22 辺りで)やった、チャーチモードのスケールが7種ありましたよね。

その中の、「エオリアンスケール」と「ナチュラルマイナースケール」は同じものです。

名前が違うだけです。

この辺りは、単にカテゴリズされた時代や国、言語が違うことによるものだと思うので、

エオリアンスケール = ナチュラルマイナースケール

と、さっくりこの認識でいてください。

では今回は、この辺りにしておきましょう。

ローマ数字やら、英語やら、新しい単語やらが沢山出てきて、読んでいて、知恵熱が出て来ているかもしれません。

以下、今回のまとめです。

key=Am とあった場合、

・その楽曲のトータル・センターは『A 音』

・その楽曲の基準スケール(基準ダイアトニックスケール)は『A ナチュラルマイナースケール』

key=Am の楽曲のダイアトニックコードは、

I m	(I m7)	Am	(Am7)
II m(b5)	(II m7(b5))	Bm(b5)	(Bm7(b5))
b III	(bIII M7)	C	(CM7)
IV m	(IV m7)	Dm	(Dm7)
V m	(V m7)	Em	(Em7)
b VI	(bVI M7)	F	(FM7)
b VII	(bVII 7)	G	(G7)

・A ナチュラルマイナースケールと C メジャースケールは構成音と同じ

・A マイナーキーと C キーの楽曲のダイアトニックコードも(出てくるコード自体は)同じ

・ナチュラルマイナースケールとメジャースケールを比べると、
3rd、6th、7th の 3 つの音 **が変化している**

(※↑重要です)

主となるマイナースケールは 3 種類、

・ナチュラルマイナースケール(自然的短音階)

・ハーモニックマイナースケール(和声的短音階)

・メロディックマイナースケール(旋律的短音階)

がある。

チャーチモードのエオリアンスケールとナチュラルマイナースケールは同じもの

と、こんなところですね。

いきなり全てを把握するのは大変なので、今後、使っていく中で、
1つ1つ身につけていきましょう。

では、次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼